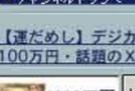

MSNBC就職転職なら信頼おける求人が 30,000件以上!!



【注目】限度額で選ぶならオリックス。V.I.Pローンカードならご利用限度額最高300万円【入会金・年会費無料】

ローンカードを限度額で進んでますか?

チャンネルトップへ

【選だめし】デジカメ 100万円・話題のXbox

1000万円 抽選 DreamMail

バックナンバー
 田口ランディ
 M・キーノート
 茂木 宏子
 吉村 作治
 佐保 綾子
 鈴木 真二

ショートコラム
 ニュースセレクト
 フォトジャーナル
 カルチャーコラム
 辛口映画評
 ニュースなひとこと
 メール配信サービス

高速回線620Mbpsの専用サーバー貸します
 複数ドメイン一括管理！ウイルス駆除も万全！
 【無料】でお試しいできる

金持ちビジネスマンが密かに実践するルールが存在するって知ってる？

言葉なき動物の代弁者——アメリカの動物擁護団体の活動から (1)

2002年5月8日

吉田 朱見

最近、日本でもペットを共に生きる存在とみる動きが定着し始めている。米国では、動物愛護活動がさかんで、全国規模の団体も多い。彼らは、動物保護を道徳面から訴え、人間と動物が地球で共存するための最善の方法を模索しているという。情報収集のためには、相手先にスパイを潜り込ませるような、CIA顔負けの手段もいとわない団体さえある。米国のこうした団体の活動を追って、ヒトと動物との共存について考えてみたい。

思えば私が育った祖父母の家では、いつも犬が飼われていた。記憶の一番古いところからたどると、ロン、リリー、ジョン、エス、そしてゴエモンと、日本の犬らしい名前が心に蘇る。家族も人並みにペットを可愛がる人たちだったといえる。しかしである。数10年前の日本の一般的なペットに対する概念は、やはり「番犬」というのが圧倒的多数であったろう。「犬畜生」。これは人を犬になぞらえてのしる言葉だが、ペットでもやはり「畜生」なのであった。「家族の一員」などというやさしい言葉はまだその片鱗すらうかがえなかった。「働け、働け」「追いつけ、追いつけ」の、高度成長期のころのことである。ペットごとにやさしくしている暇なんかなかったわけだ。というわけで、我が家の犬は外の犬小屋につながれたまま、どんな寒波が押し寄せても、けっして家の中にあげられることはなかった。



ペットショップで買うのではなく、捨てられた動物が収容されるアニマル・シェルターから、動物を引き取ることを促すPETAのポスター

4、5歳の頃だっただろうか。ディズニーのわんわん物語の挿し絵の一つに、暖炉の前のロッキングチェアに座った貴婦人とその足下で幸せそうに眠る愛らしいの犬のカラー絵があった。「まあ、××ったら、頭をなでているうちに眠ってしまったわ……」と貴婦人。ロッキングチェアに座ったまま、どうやって足下の犬の頭を撫で続けたのだろうかというのが、まず頭にわいた疑問だったが、そのひねくれた思考を除いても、この本の光景は子供心に焼き付いてしまった。同じ犬なのに随分待遇が違うものだとも思った。なにせ幼児のころのことである。発想が幼稚なのは許してほしい。しかし、私がいつも望んでいたものはこれだったのだ。愛するペットと一緒に寝たかったし、ご飯も一緒に食べたかった。が、そんなことを言い出そうものなら、病院にでも連れていかれかねない。ペットが死んだ時は、思い切り泣きたかった。しかし「いい加減にしなさい」叱りつけられるのが関の山。まあ、明治生まれの人たちは、ちょっと他より厳格だったのかもしれないが……。

●社会的影響力の強い、アメリカの動物擁護団体

最近では、日本でも室内犬を飼う人が多いし、ペットを亡くした時の対処法「ペトロス」の本なども出回っている。悪い傾向ではない。反面、子供たちの欲求不満からか、痛々しい動物虐待のニュースなども目につく。まあ、ひと昔前は同様の事例が起きててもニュースとして取り上げられることもなかっただけかもしれないが。

私の住むアメリカでは、動物愛護に対して高い意識を持つ人々が多く存在する。日本でも活躍している動物愛護関連の団体は数多いが、全国規模のものとなるとあまり見当たらないようだ。しかも大きな社会的影響力を持つものとなると、その数はかなり限られるだろう。アメリカにも数多くの動物愛護団体があり、それぞれが掲げるポリシーは異なるが、大きなものは全米組織、ときには海外にも支部を持つほどの規模で、その社会的影響力も強大である。彼らが掲げるものは、「ペットを捨てるのはやめましょう」「動物は可愛がりましょう」などといった、どこかのお役所のポスターのような薄っぺらいものではなく、動物保護を道徳面から訴え、人間と動物が地球で共存するための最善の方法を模索しているといえる。家庭でのペットの扱い方から、企業などにおける動物実験や人間の食生活まで、ありとあらゆる動物関連の事例に携わり、自らのポリシーに基づいた正当を勝ち取ろうとしている。そのためには、スパイも使うし、デモも行う。訴訟だって珍しいことではなく、少々過激とも思われるアクションを繰り返す団体もある。

PETA。この団体は、道徳的な正しい動物の扱いを求める全米組織の非営利団体。本部をバージニア州に構えるPETAは、1980年に設立され、「動物は、食べるものでも、着るものでも、実験に使うものでも、余興に使うものでもない」という、一見シンプルな主義に基づいて、動物虐待に関する知識を公共に提供したり、動物と人間の正しい関係の理解を促したりしている。

アメリカにおける動物関連の事例などを挙げながら、日本ではちょっと見られないほど多岐に渡る同団体の活動を紹介してみたい。以下、かなり過激な事例を掲載するので、気の弱い方や神経質な方はこれ以上読み進めるのを遠慮していただいたほうがいいのかも。

●猫虐待に対する裁判所の甘い判決——精神鑑定は必要無い？

ウォールグリーン(ドラッグストアだが、写真の現像も請け負っている)の写真屋で働く店員は、現像から上がってきた写真を見て、仰天、腰を抜かさなげりになった。切り刻まれ血まみれでシャワーカーテンのレールに吊られているネコとその血を浴びた女性が写っていたからだ。

この写真の撮影者は、スコット・ヘーリンとその妻、リア・シェファードソン、そして友人のポビー・コンドン。この顛末(てんまつ)はこうである。あまりに泣き声がうるさいと、リアはステーキナイフでその猫ののどをかつきり、半狂乱になった猫の体を押しさえ付け、その体を切り刻んでレールに吊るした。それだけではない。その一部始終を友人が写真撮影していたというから、狂気の沙汰である。猫の死体は最終的に、地域の共同プールに投げ込まれたらしい。

写真店からの通報により、彼等は起訴されたが、検察側の重罪求刑に対して、カルトン裁判長の見解は「その猫が残酷な殺され方をしたかどうかについては証拠が不十分」というものだった。結果、原告は少々の動物虐待という軽罪に問われたのみ。最終判決が下るのは4月下旬の予定だが、アニマル・シェルターにおける一定期間のボランティア活動のみということで、放免になるような雲行きである(アメリカでは、軽犯罪に対する刑罰として、地域でのボランティア活動などを申し付けられることがある)。

しかしである。考えてもみてほしい。動物虐待者をアニマル・シェルターに送り込むなんて、幼児虐待者を保育園に送り込むようなものではないか。どうい行為が行われたかは証拠不十分としても、そもそもこうした写真を撮影する行為自体に精神鑑定が必要だとは考えなかったのだろうか。更正プログラムへの参加も課さずして、ボランティア活動だけで「ハイOK」では、同地域住民は安心してペットを飼うどころか、道も歩けないのではあるまいか。

PETAがこの事件に注目したのはいうまでもない。同団体は、被告たちの行為に対しては、法律で許す限り最大の刑が課されるべきとして、全米の人達に裁判長へ嘆願書を書くことを呼び掛けるなど、現在運動を繰り返している。

●ガス室で悶死が保険所の "安楽死" ?

アニマル・コントロール。日本の保険所の一部のようなものだと思っていただければよい。捨てられた動物や危険な動物などを取り締まるのが主な業務だが、シェルター行きとなった動物が新しい飼い主に引き取られる確率は5匹に1匹(ASPCA調べ)。まだ子供のうちなら「あら、かわいい」ということで引き取り手もあろうが、成長してしまった動物たちに引き取り手があらわれる確率は、日本の消費税ほどもない。果たしてシェルターでは、残った動物の処理法として安楽死という方法を取らざるを得なくなるところもある。

PETAは安楽死自体にも反対はしているが、それより重要な点はその方法である。ここ、テキサス州コープス・クリスティ市のアニマル・コントロールでは、どうせ殺してしまうのだからと、何日も餌(えさ)も水も与えず動物達を放置していたばかりか、彼らがいう安楽死とは、通常に理解されているそれとは大きく掛け離れたものであった。長年使用されてきたびれたガス室は、その機能を100%発揮することは不可能に近い状態で、中に引きずりこまれてラッシュ時の地下鉄さながらのガス室の中で、2~3時間という長い時間をかけて犬などを悶死させていたのである。使用中にエンスト状態になってしまうため、何度も何度も、時には40回から50回もスイッチを押しなおさなければならなかったことも1度や2度ではないという。

同アニマル・コントロールに対し、PETAは安楽死でもっとも人道的とされる静脈注射の使用を要求し、現在これは検討中という回答を得ている。しかし、また新たな事実が発覚した。このガスで殺害されない動物は、麻酔を打たれることもなく、心臓内注射によってこの世を去っていったというのである。米国獣医学協会によれば、この注射によってもたらされる苦痛は尋常なものではなく、まことに人非道な "安楽死" といわねばなるまい。しかも背骨を骨折した犬が1週間も放置されたり、またバルボ腸炎で悶え苦しむ犬をそのまま2週間も檻の中に入れておきしにしていたという証拠がPETAに寄せられている。引き続きPETAは、このケースに関して様々な調査・対策を試みている。

●おもしろ半分動物打ち——これは単なる不品行？

3月30日のことである。何本ものクロスボーの矢でいぬかれたオボッサム(北米、南米に住む有袋類)が塀の上を息たえだえに歩いていた。目撃者の話によれば、サンタフェ・スプリングスに住むクリック・ジェームス・ブルーモールがこの小動物目掛けて矢を放ち、その後、メタルパイプでめった打ちにして殺してしまった。

この事例に関してPETAと同地域のアニマル・コントロール(SEAAC)は州の副検察官、ロバート・ジョーダン氏に働きかけ、ブルームモールに対する重罪判決を要求したが、無念にも動物を虐めたという「不品行」という罪しか課されなかった。動物の命をおもしろ半分に奪う、しかも矢で打ったり、めった打ちにしたりという行為をもっと重大と捕らえるべきとして、PETAは現在公共への協力を呼び掛けている。

●アメリカ初、最高裁判所の "動物虐待" 有罪判決

実に70万人以上のメンバーを誇る、世界最大規模の動物擁護団体PETAは、過去、大手企業を相手どって勝利を手にするなど、様々な経歴を持ち、そのたびにこの団体が社会に与える影響も大きくなっていった。無意味な動物実験に反対する同団体は、1981年、シルバースプリング市のラボにおける動物虐待を暴露。これにより、アメリカ史上初めて、動物虐待という罪で関係者らが逮捕されるに至った。しかも、これは米国最高裁判所が初めてラボに対して有罪判決を下した最初の事例となったのである。

全国規模で広がる組織だけに、はりめぐらされたアンテナは様々なニュースをキャッチする。情報収集のためには、相手先にスパイを潜り込ませるような、CIA顔負けの手段もいとわない。デモなども行うので、その行動を過激と批判する人々もいるが、PETAの活動はそうした目立ったものだけではない。道筋を立てて、法に訴える方法も心得ているし、必要となればどんなにコストがかかろうとも行動を起こす気風のよさもさることながら、人々により多くの知識・情報を提供することにかけては心骨を惜しまない。

同団体だけに限らず、こうした活動によって、これからも日々何かが変わっていくだろう。これに同調するか、反発するかは個人の判断によることとなる。しかし、知らないで批判するのは正当ではないだろう。まずは、知ってみたいという姿勢が大切なのではないか。



毛皮に反対するPETAのポスター